
学校臨床の新展開

—⑦ひとり親と子育て—

浦田 雅夫

京都造形芸術大学

「やさしい花」を見て

前回は、『ひとり親』がふつう」と題して、ひとり親について考えましたが、今秋、NHKで放送されたドラマ「やさしい花」は、ひとり親と児童虐待について、多くの問題提起をおこなっています。

若年での妊娠・出産、結婚などは親族からの理解がなかなか得られず、若い夫婦やシングルマザーが孤立無援の状況で出産を迎えることも少なくありません。特にひとり親では、経済的問題、就労問題、子どもの保育問題などが深刻ですし、そのことを背景として虐待やネグレクトといった養護上の問題に発展することもあります。

さて、ドラマのなかの一場面。母親は不安定就労のなかネグレクト状態になっている子どもの養育をふりかえり、久しぶりに子どもの好きな料理でも作ってやろうと思うのですが、子どもから、「いらない。」と

拒否されます。母親は、「何で、あんたのために、こんなに一生懸命やってるのに…」と泣きながら、子どもを叩き訴えます。

何も見返りを求めているわけではないのに、人は人に対して一生懸命であればあるほど、思いが強ければ強いだけ、「なぜ、わかってくれないのか」という感情が湧いてきます。これは、親だけではなく、援助者も陥りやすいことではないでしょうか。

もうひとつは、児童虐待通告の問題。「疑わしきは通告すべし」と法律上は規定しているのですが、一般市民には通告することへの躊躇があります。また、果たして、通告をするだけでよいのかという葛藤も。ドラマでは、かつて児童養護施設で生活していたという娘が母にむかって「親子離れたほうがいいなんて、そんなに簡単にいわないで!」「親はいいかもしれないけど子どもは悩むのよ!」「親子は一回はなれたら、一緒になるのが難しいの!」などと感情をあらわにして訴える場面がありました。疑わしきは通告、必要に応じて専門家が親子

分離し保護、あーよかった。ということではないのです。そのことを、しっかり伝えてくれています。

ある学生はこのドラマの感想をこう語っています。

「私は、今まで虐待をする親の気持ちを全く理解することができず、反感を持っていました。でも、このドラマをみて、少し考え方が変わりました。やはり、ひとり親で子どもを育てることは大変だし、周りに、相談できる人がいなかったら、なおさら大変だと思います。虐待をするような人が何で子どもを産んだのか？と思うこともあったけど、なかには虐待したくてしているわけではなく、ほんとうは子どものことを何よりも大切に思っていて、どうしようもなくなったときに、思わず手を出してしまっている人もいることがわかりました。」

虐待をする「とんでもない人」は、実は「私」も含め、状況しだいで、誰にでもあり得ることだと感じたのでしょうか。「とんでもない人」から「子育てに困っている人」へと認識が変わった瞬間です。

地域や学校での支援

先にも少し述べましたように、特に若年の核家族やひとり親家庭では、何らかの要因により、簡単に養護上の問題に発展することがあります。親の就労時間や内容は子どもの家庭での生活に大きな影響を与えま

す。深夜の就労など親の就労形態によって、就学前の子どもは通常の「保育」が受けられないため、やむを得ず、24時間託児所などの「認可外保育施設」を利用せざるを得ないこともあります。小学校にあがると、いわゆる「放課後児童クラブ（放課後児童健全育成事業）」がありますが、主に低学年が対象ですし、時間も限られています。また、「ファミリーサポートセンター事業」を活性化させている地域もありますが地域間格差が大きいのが現状です。児童養護施設や乳児院などの児童福祉施設では、「子育て短期支援事業」として、「ショートステイ」や「トワイライトステイ」を各市町村と契約して行っているところもありますが乳幼児が利用の中心ですし、このシステムは児童養護施設などの充足率が低かった時代にできたものですので、いまのように充足率が高い都市部の施設などでは、「ショートステイ」や「トワイライトステイ」としての枠自体が少なくなって受け入れられない状況のところも少なくないようです。児童相談所による「一時保護」というものもありますが・・・。

さて、このような養育上の課題をかかえたケースには、社会資源を活用し、関係機関と協働した支援が必要になってきます。そこではニーズを的確に把握する力や、アセスメント、プランニングする力、関係機関と協働する力、ケースマネジメントを行う力などが求められます。面接室を超え、関係機関と協働し、状況の変化に臨機応変になおかつ科学的に見立て、手立てを考えることが求められます。このようなケースがスクールソーシャルワーカーの真骨頂が発揮される例のひとつではないでしょうか。

就学前の児童はもちろんのこと、就学後の子どもたちの放課後の問題もとても大事なことです。

既存のシステムでは立ちいかないときソーシャルワーカーは新たな社会資源を開発することも求められます。子どもの貧困が注目されるようになって以降、各地には、貧困や家庭の養育力に起因する子どもたちの学力格差や生活の質の格差を補完するための資源ができています。「遅寝、遅起、朝ごはんなし」で生活リズムが崩れ、学習習慣が定着していない子どもや、親から生活技術や生活文化の伝承がなされずにいる子どもたちが少なくないためです。

京都の幸重さんは、スクールソーシャルワーカーの傍ら NPO を運営し、地域の空き店舗を活用し、低価格で子どもたちが朝食を取れるサービスを行ったり、入浴や夕食のサービスをされています。

<http://www.kodohiro.com/>

極めて単純ですが、毎日の食事、おいしいものを楽しく食べること、安心して寝ることが、大人も子どもも明日への活力の源ではないでしょうか。そんなあたりまえのことを安心できる大人が支えるとき、子どもは本来持っている力を信じて、前に少し踏み出すことができるのだと思います。